

うかれある記 : 雑録

| | |
|-------------|---|
| 著者 | 蝶二 |
| 雑誌名 | 龍南會雜誌 |
| 巻 | 4 6 |
| ページ | 2 0 - 2 6 |
| 発行年 | 1896-04-07 |
| その他の言語のタイトル | うかれある記 : 雑録 |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/4902 |

雜 錄

うかれある記

蝶

二

阿蘇の山邊に残りし白雪跡なく消えて、白川の水かみ結びし氷の解けそめしより、梅咲き梅散り、老を啼く鶯はやくも里を辭して去れり。見渡す限り、野も山も春は隈なく音づれて、城南の櫻花今を盛ま咲き亂れ、北郊の桃花朱唇半綻びぬ。うる／＼と肌を觸るゝ風の快に、遊心むら／＼と起りて禁ずると能はず。一日杖を千原が岡に曳きし、そゝるに、國に在りける日莫逆の友と、吉野竹（名は同くけれど大和のみよし野にはあらず予が父國高知城南三里弱の處にあり櫻の名所を以て鳴る）の花にうかれあるきことを想ひ出で、當時の日記など聞するうち、次の一篇をもとめ出しぬ。花間に狂へる蝶々の、岡より拙き舞の一曲、皆人の清眼を汚さんこと恐多けれど、ある人の勤むるがまに／＼かくの如し。

明治廿九年四月十八日

吉野の櫻今が見頃なりと人の罵りさわぐに、兼て約せし時は今なり。見遅れて散らさんば惜しき限りぞ。花見の催明日やよからん。障は有まじさや。など友なる戀花が許へ宛て、文認めしが、不圖椽端に出で、空のけしき打眺むるに、雲のたゞすまひいとあやしく、翌日の日和の覺束なかりければ、これには經驗ある隣の父爺に尋ぬるに、けふ黄昏まではたしかに持ちこたへんが、あすは必ず雨となりなん。との答に、あたら盛の花を散らされては遺憾なり。さらば明日ともいはず今より直に出かけばや。最早晝に間もなければ、たかゞ三里の路程何ほどのとかあらん。と復かきあらためて持たせ遣りぬ。

花のふみ空見直して封じけり

蝶

二

戀花が許より返事疾くありたり。開き見れば何も無くて只次の一句あるのみ。

けふあすといふ間に花は散りにけり

これはこれ予が去歳の春、處も同じ吉野の花に見遅れて、口惜さの餘りに書きて遣したる句なり。さては彼も予と同じ意か、今は何猶豫かせん。とそこそ早かれと晝食をすまして、戀花許音づれぬ。戀花疾くに準備整ひてあり、予には嬉しき瓢さへ腰にして余を迎へぬ。先づ兎も角も座敷へとすゝむるを強て辞し。共に杖を南にむけて徒歩をひろひぬ。市中は車の音物賣る聲など囂しければ互に言葉も交へず。急ぎに急ぎて鏡川の岸に出づ。危しき空の景色は名残なく晴れて、一點の緋雲たも止めず、日は麗かに、遠こちの山々霞にとざりておぼろく。隣の老爺が明日の日和の豫言さへ今は信ぜられずなりて、戀花去きりに傘の用意のいたづらとなりしことを嘆ちぬ。

天神橋畔、鈴をどめて下を望めば、水清澄にして底の砂をも數へつべく、倒に映る我影、頭の髪をも讀まれつべし。拭ふが如き一面の碧瑠璃、實に其名にそむかざりけり。

水際に化粧をこらす柳かな

一一

橋を渡りて右に折れ、西へくと辿りぬ。見れば、はや予等よりもさきに、貴さも賤しきも、色くの袖たもとふりはへて、さまざまの心くに打むれて行く人いと多かり。思ふ心は誰も一つか。

天満祠前の梅林、霜葩已に枝を辭して、芳姿認むるによしなし。眞如寺の境内、二株の彼岸櫻花爛熳、盛は昨日にやなりぬらし。落英繽紛空に知られぬ雪を降らしぬ。少焉杖を止めて一献酌まんと妙なれど、目さず處はまだく遠く、日も中天に懸りたれば、愛を割きて急がんとするに、咄、この没風流漢めが。と聲高く罵る戀花が聲に、驚かされて振返れば、箒持ちたる男此方に向きて茫然たり。

こゝろなや花の庭掃く寺男

一二

これよりは屈り曲りし田圃道、左は一帶の青螺足下より起り、高き梢や低き枝、青くど若葉まげりて、翠またるばかりなり。右は麥隴菜圃廣漠として相交り、綠波黃浪風に隨て起る。

麥綠菜黃交はる處川ひとつ

戀 花

天に在つては連理の枝にたぐへられたる比翼の蝶の、翻々として菜の花に狂ふけしきいと長閑に、人を逐ふて戯るゝ風情さてもまほらしや。

蝶舞や何處迄つゞく菜の圃

二

人に逃げ人に馴けり蝶二つ

花

蝶舞や後になり又さきになり

二

いさゝ小川の水の流潺湲として清らかに、塵も浮ばず。

さゝなみや蛙の泳ぐ春の水

花

道は次第に廣くなりて、崩出る若草の間を縫へり。試に素足のまゝ芝生の上を踏めば、柔かにして心地よく、毛氈の上を歩むが如し。

若草や下駄提げて行く娘の子

二

われ等よりは少許前に進める紅裾の一隊、二五には一人の不足なれど、正に姦といふ字の二乗なれば、稻村雀の囀よりもかしまし。アレ蛇が、と一人の叫びまに魂消て、轉けつまるびつ遁まどふさま、何たる殺風景ぞ。みにくしどもとくにくし。

蛇と聞きては予もさすがに心よからず。さりどて、恐しきものゝ見たきは人情の常なり。瞳を凝して其あたりを探れども見えず。時に戀花、われ見出しぬ、とて捕へて予に投げつくるに、予胸躍りてハッ

ど身を翻へせば、戀花笑を含みて獨興に入り

若草や蛇かどまがふ枯木の根

花

予が胸の動悸はじめて静まりぬ。戀花後に予に語つて曰、この時の君が姿、繪にも畫けぬやうなりぞと、さりとては意地わるき人かな。

春風に力くらふるは雲雀か。耳を掠めて遠く飛び去りしは燕か。

雲雀の聲ひまなくして春長閑なり

全

まの直に乙鳥一羽かすみけり

日はますく麗かに照渡りて、風軟かなり。前面より來る一群の小荷駄馬、子に乗せたるもあり。花を負はせたるもあり。

春風や馬上にねむる男の子

花

春風や馬の脊に負ふ花一枝

二

行きく道は片山蔭となりぬ。若葉を渡る風清くして鳥聲幽なり。バサくと音するは、椿の花の落つるなりけり。オヤと叫ぶ聲に驚かされて振かへれば、春風に墨染の袖翻へす僧ひとり、澁面つくりて今しも頭上に落ちたる花を手を取れる處なり。

落椿 オヤといふ間もあらばこそ

二

落椿坊主あたまをたつきけり

花

路傍に一軒の白家あり。田舎には過ぎたる門の構にして、柱に何やらん貼紙せり。戀花が強て袂をひくに、杖を止めて讀み下せば

わがやどの花、今正に満開にて侍り。けふしも、止こがたき要用ありて市に出づ。接待の出来ざるは口惜しき限にこそ。塵茶なれど湯もたぎれり。御休息旁御賞美あれや。

水莖の跡も醜からず。さても心にくき主人が老わさや。いざ去らば一休せん。と門をくぐりて家を巡れば、賤しからぬ前裁ありて、二株三株の八重櫻咲き亂れたり。程よき處に床几など据て氈を被ひ、硯に短冊さへ添へてありけり。げに主人が心も推はかられぬ。まのあたり言葉交さぬこと、くれぐれも心残なれ。短冊汚さんことも惜けれど、主人が厚意にもそむきがたくて筆とりつ。

さりどてはゆかしき花の主かな

二

大白を浮べて一夜を花に明さばや

花

花も見、茶も呑みつ、飽まで足の勞を休めて、やがて立ち出づ。猶行くあと五六町にして、目ざす吉野の花園に着さぬ。

見渡せば、一目千本の趣はなけれど、一重も八重もこきませて、時を得貌にこのもかのもに咲き亂れ。さながら、雲のわたかまりの如く、霞のたなびきたるに似たり。

花爛熳霞耶雲耶將雪耶

二

仰き望めば巉崖刀を削り、俯して眺むれば清泉玉をまろばす。

此山に此水ありてこのさくら

花

葭簣張の旗亭三四、花間を點綴して俗客を喚び。葛屋葺の第榭一つ、清流に臨みて雅客を待つ。凡そこゝらのありさま、一つく書たてんもくだぐしく、否予等が拙き筆の及ぶ所にあらず。なかくに言はぬが花よ。

花の陰知らぬ同士のまどぬ哉

二

花ひらくと崑の上に落にけり

花

ひらくと舞は蝴蝶の散花か

二

俗塵を避けて、谷陰の自からなる茵の上に座を占めつ。花を賞でつゝ、觴を飛ばすこと數献、瓢傾きて底を叩きし頃は、夕陽既に西にかたふきて、時にくへりし百鳥の囀喧しくなれり。何處の寺よりか、撞き出す入相の鐘の聲に驚かされて、飽なくに、惜しきわかれを花に告げぬ。

花も人も散はじめたり鐘の聲

二

鐘撞たあとは乞食の花見かな

全

ひた急ぎに急ぎて歸途に就きたれど、行くと僅一里許、梓弓春の日影は全く沈みて、暮色蒼然、進むに従ふて、暗はますますひろがりぬ。老爺の豫言終に偽ならずして、空には一點の星の影だに見えず。腹は次第に空しきを感じて、足は漸く疲を覺えぬ。戀花逢ふ人毎に、知れる路程をことさらに尋ぬるもをかしや。

三里とはまことか花のもどり道

二

互に聲かけ合ひて相はげまし、杖を力に道を辿りて、漸く鏡水の涯に出しときは、糸の如き小雨まばらに降り出で、微酔の顔を撲ち、漁家の燈火影朦朧たり。

とも之火幽なり柳の陰の一軒家

花

春雨やかさ持ながら濡れて行く

二

この夜雨激し、降りて盆を覆へし、翌日に至りても猶やまず。あはれ吉野は落花狼藉とぞ聞ゆし。

長閑さは花見る人の心かな

(なはり)

堀 巢 鶴

伊喜見謙吉

緒 言

蘇山甚た高からず、白水甚た深うらず、然れども其間よく偉人を生ず、一種靈妙の氣、磅礴して鬱積するものなくんげあらず、或曰、熊本之士は、朴直不飾、義氣凜烈、慷慨志を談するに足ると、是れ必ずしも然らず、然れども、其風は淡として水の如く、烈として火の如きものなきにあらず、夫れ士風の生ずる、豈一朝にして成るものならんや、我地古より名將の都せし所、千歳の下これを仰げば、人をして自ら肅然として起たしむるものあり、誰かいはんや、我士風を興起せしむるに、これ與て力なしと、徳川氏の時に當りて細川氏此所を領ま、傳へて維新の際に及ぶ、中興の主重賢の時に至りて、秀偉賢豪の士、沛然として輩出し、文學盛に、武道振ひ、衆富み、人和し、民に怨む者なし、西陲の僻隅、別に一天地をなす、諸國の士來りて法を取、文を學び、武を習ふ、こゝに至りて肥藩の基礎漸く固し、夫れ貞享、元祿の頃より、寛政享和の頃に至るまで、凡そ一世紀の間、偉人の出づるもの甚だ多し、予は此時代を稱して、偉人輩出の時代といはん、然れども、其風巍然として高く、渾然として長く、其名山と共に動かす、川と共に盡さざるものは、堀巢鶴を措て豈に他、あらんや、彼一度出で、我藩の士風、淡は益淡に、烈は益烈に、爾來殆んど二百年、今猶其餘光の輝然たるものあるを見る、想ふに我藩の制度文物